



# 人の力で感動をつくる

今年、創業百十二年を数える福田組。建築・道路・鉄道・港湾・エネルギーなど、さまざまな分野で新潟の総合建設業をリードしてきた。経営理念は「わが社は挑戦する企業体質のもと、人間と環境を大切にし、感動的価値の創造をめざします」。現場叩き上げのリーダーとして「昨年、第八代の社長に就任した太田豊彦社長に、福田組の考えるふるさとへの地域貢献と、「最も重要」と語る人材育成について聞いた。

## まず「人」ありき

水上を舞う織田信成プロの華麗なステップに、集まった四百五十人の市民が酔いしれた。二月三日、新潟市にオープンした『新潟アサヒアレックスアイスアリーナ』。縦三十、横六十メートルのメインリンクとサブリンクを備える本格的な水上競技施設だ。福田組はこの建設に携わった。「気密性と断熱性が求められる施設で、エントランスとリンクの境にエアカーテンを設置するなど、さまざまな工夫が施されています。ここで育った選手が将来オリンピックに出場してくれば」。セレモニーを見守った太田豊彦社長は期待を込める。

「新潟市民芸術文化会館りゅうとびあ」、「アオーレ長岡」、「新潟日報メディアシップ」など、県内のランドマークのひとつに携わってきた同社。社長は「わが社は誠実と創造をもって事にあたり、建設を通じて社会に貢献します」に込めた思いを太田社長は説く。「企業は常に現状を打破し、前進しなければ成長できません。挑戦し続けてこそ、初めて社員や協力会社の皆様の幸せ、お客様の満足や社会貢献は実現するのだと考えます」。大切にしているのは人材発掘と育成。「企業は人なり」を説き続けた故・福田正名誉会長の言葉が常に頭にあるからだ。「人づくり」は太田社長自身の経験から生まれた哲学でもある。

「二十七歳のとき、県立自然科学館の建設を担当しました。私より年上の職人約五十人を束ねる仕事で、礼儀正しさや言葉遣いに気をつけなければ、人は動きません。総合建設業では、現場の所長が社長の代行として仕事を預かり、時には数百人を指揮します。多くの人間をまとめる人間力、リーダーシップ能力が求められるのです」。社員採用にあたっては社長自ら大学に足を運び、学生と対話し、人物を見極める。「以前と比べ、建設業を志す学生は減りました。だからこそ、自ら率先して建築業や土木業こそ達成感のある、やりがいのある仕事だと学生に直接伝えます。我が社は新人研修に二か月の長い時間をかける。各部署での研修のほか、足場組み、コンクリート打設など、現場作業も一通り経験させます」。社員の資格取得率が高いのも福田組の特徴だ。「技術士が十四名、二級建築士が百十八名(平成二十四年現在)。高度な資格を取得する大学院進学のための費用を会社が負担し、社員の成長を応援しています」



新潟アサヒアレックスアイスアリーナ



## これぞ地域貢献

建設業を取り巻く環境は、この二十年で大きく変化しました。官民投資額はバブル直後の平成四年がピークで、約八十四兆円。しかし、平成二十二年には四十二兆円と半減した。福田組も平成二十三年度に赤字決算となり、苦しい時期を経験したが、平成二十五年には経営計画を前倒しで達成するなどV字回復。「社員一丸となって乗り越えることができた結果です」と太田社長は語る。

今、震災復興、景気の回復基調、消費税増税前の需要などで追い風も吹く。ただ「建設業は長いスパンで物事を判断しなければならぬ」と気を引き締め、平成二十六年を初年度とする三か年の新中期経営計画をスタートさせた。

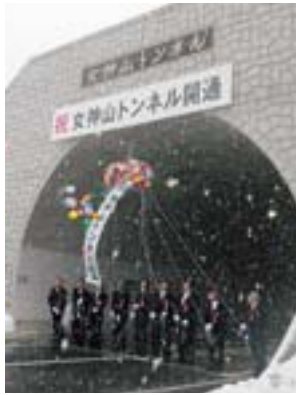
「中期経営計画は、ゆるやかな右肩上がり達成し、平成三十年に一千億円を達成しよう。その結果として、平成三十年には『新潟で働きたい企業ナンバーワン』となって、学生から『ぜひ福田組で働いてみたい』とってもらえる会社を目指そうと社内に大号令をかけています」

東証一部上場企業として、全国で事業を展開する福田組。その一方で、新潟への地域貢献の思いは強い。太田社長には忘れられない出来事がある。平成二十四年末、佐渡市に完成した女神山トンネルの開通式のことだった。「関係者でテープカットをしたときのことです。住民の方が脚立

の上に立ち、万歳をし始めたのです」。万歳の声はなかなか止まなかった。それまで細かい急勾配を苦労しながら行き来していたであろう住民たち。その笑顔と鳴り止まぬ拍手と歓声に、太田社長の胸はふるえた。住民の姿を見て太田社長は思った。「公共工事はこうあるべきだ」

圃場整備など、新潟県の農業発展の礎づくりにも汗を流し、米どころ新潟のインフラ整備にも携わってきたという思いは人一倍強い。「私たちの仕事で一番誇れるのは『達成感』があることです。ゼロからスタートして、一つひとつ積み上げ、完成したあと、現場はきれいに片づけられる。これは農業にも通じるものがあります。何も無い土を耕し、種を播き、育み、収穫し、土を平らにする。すなわち無から有を生む仕事だ」

今、新潟県は人口の減少が社会問題になっている。太田社長は語る。「新潟出身の若い人材を採用することで、少しでも人口増に寄与したい。建設業を通して、新潟の活性化のために貢献したい」



佐渡・女神山トンネル開通式



グループ社員有志で構成する万代太鼓福闘会。社会福祉を目的とした文化活動を行い、平成18年には「勤労者ボランティア新潟賞」を受賞。



「人づくりこそが「ものづくり」の原点。



小さな取り組みを積み重ねて地域との距離を縮め、信頼関係を築く。



脈々と受け継がれる「職場訓」は、すべての事業所に掲げられている。



平成25年度  
工事成績優秀企業認定書



未来を担う子どもたちのため、さまざまな形で工事現場の見学会を開催。



本社外観

●株式会社福田組  
〒951-8668 新潟市中央区一番堀通町3番地10  
TEL 025-266-9111(代表) FAX 025-266-5591  
http://www.fkd.co.jp/

株式会社  
**福田組**  
新潟市中央区  
一番堀通町3番地10  
代表取締役社長  
おた 豊彦 さん







長岡市の旧越路町に広がる田園地帯・中沢地区。「ほたるの里」と呼ばれるこの地区で、平成七年、任意の生産組合が「有限会社ホープイン中沢」として生まれ変わった。「中沢の中にある希望」との願いを込めて名づけられた会社は現在、地区内七割もの農家の委託を受けるほどに成長した。農家の長女に生まれ、家業を継いだ駒野亜由美社長に農業への思い、夢を聞いた。

有限会社  
ホープイン  
中沢

長岡市越路中沢625-2

代表取締役  
こまの あゆみ  
駒野 亜由美 さん



# 農業ってかっこいい

## 父の姿を胸に

「稲作で最も難しいのが田んぼの水管理。田植えや稲刈りのとき、水量を減らし過ぎて、増やし過ぎててもいけないんです」

屈託のない笑顔で話す駒野亜由美社長。ホープイン中沢の二代目社長として日々汗を流している。耕作面積は約五十ヘクタール。現在、米のほか、大豆やアスパラガス、ブルーベリーなどを栽培する。その一方で、

家に帰れば妻でもあり、中学生の子を持つ母でもある。多忙な毎日を送りながらも、その表情からは農業を楽しい様子が見えわたる。それは、幼い頃からいつもそばに農業があつたから。

三人姉妹の長女として生まれた駒野社長。父・細川梅一さんは駒野



まだ「手伝い」で農業をしていた頃



一束ずついねいに調整

社長が生まれた昭和五十三年に脱サラして専業農家となった。「毎日田んぼで遊び、父の後について行つては田植え、草取り、稲刈りを手伝ってきました」。家に帰れば祖母がワラで遊び道具を作つてくれ、「亜由美は跡取りだから」と父からも周囲からも言われて育つてきた。

ところが、思春期になると泥だらけで働かなければならない農業に疑問をもち、農業から少し気持ちが遠のいた。駒野社長が真剣に農業と向き合うようになったのは学生時代、田んぼの除草作業をする父の姿を見たのがきっかけだった。

当時、駒野社長は巻（新潟市西蒲区）の農業大学に通い、寮に入っていた。夏休みに父から家業を

手伝うよう言われ、遊びたい心を抑え、実家に帰った。「夏の暑い日のことでした。父が汗だくになりながら機械作業をしていたんです。夕日を浴びた父のたくましい姿。額に光る汗を見たとき駒野社長は思った。「農業ってかっこいい」

卒業後の平成十二年、父が経営する「ホープイン中沢」に入社。本格的に農業の道を歩み始めた。「農繁期には朝の五時から仕事を始めます」。女性として体力的にきつい作業もある。特に夏場の「穂肥まき」は背中に機械を背負うため「重くて、暑くて、つらい」。それでも自分が作つた農作物が消費者から支持され、「美味しいから早く食べたい」と言われると苦労も吹き飛ばし笑顔を見せる。

平成二十三年、駒野社長は還暦を迎えた父から経営を任せられた。三人の社員、二人のパート従業員の生活を支える立場となり、農作業に加え、経営者としての仕事にも汗を流す日々を送る。新潟県内の若手農業経営者とも積極的に交流を続け、「刺激を受けています」とも。現在は他法人との差別化を図るため、「黒紫米」を栽培。「野生稲の特徴を受け継いだ黒い米で、白米や玄米に比べ、タンパク質やビタミン類、鉄分が豊富で、アントシアニンなどが含まれています」。直売所やスーパーなどで販売し、徐々に売れ行きも伸びているという。

## 農業 日本文化

を払い、周囲から愛される会社でなければ、「この愛する中沢の田園風景を守ることができません」。この思いの根底には「農業＝日本の文化」との信念がある。「小さい頃、小正月にはワラでできた『さいの神』を燃やして五穀豊穡を祈りました。農業が育んできた日本の文化は日本人の心を支えてきた。徐々に失われてきた、農業を中心とした慣習や文化を後の世代にも残したい」

また、子を持つ母として「食育」の大切さも説く。「今食べたいと思うものは祖母が作つてくれた煮菜や漬物。食は、子どもの頃、家で囲んだ楽しい食卓の思い出と共に胸に刻まれます」。だから駒野社長は子どもとは必ず食卓を囲んでご飯を食べる。そして「残さず、楽しく食べるのが大切だと思います」といふ。

夢は「中学生の息子が就職活動をするときに、なりたいた職業のトップテンに『農業』が入っていること」。そのため今、汗と土にまみれ、「かっこいい」農業経営者として汗を流し続けている。



アスパラ菜の収穫



「黒紫米」



中沢地区の7割近くの田を預かる

●有限会社ホープイン中沢  
長岡市越路中沢625-2  
TEL 0258-92-3829 FAX 0258-92-6611



本社外観



田んぼで捕ったタナゴ。「タナゴが棲める美しい環境を守りたい」と駒野社長

